

宮下和幸著『加賀藩の明治維新一新しい藩研究の視座／政治意志決定と「藩公議」』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸本, 覚, KISHIMOTO, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069564

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



宮下和幸著

『加賀藩の明治維新—新しい藩研究の

視座／政治意思決定と「藩公議」』

岸本 寛

本書は、戦後の明治維新史研究を視野に入れつつ、近年の新たな研究成果を積極的に取り込みながら加賀藩の明治維新を論じたもので、極めて意欲的かつ問題提起的なものと受け止めた。評者は、ほとんど加賀藩についての専門的な知識や政治史に熟知しているわけではないが、あくまで他藩を主に扱ってきた立場から論じることになるが、加賀藩という領域に留まらない視野の広さと問題意識という点は十分に共感できるものである。本書を論じるほど十分な力量はないが、刺激的な本書の特徴を少しでも紹介できればと考えている。なお、本書の要約はできる限り簡潔にし、その特徴を指摘するようなスタイルをとり、そのうえで若干のコメントを記載したい。

一、本書の要約と特徴

まず、本書の構成を掲げておく。

序章 幕末維新期の藩をどう論じるか

第一部 藩の政治過程における政治意思決定の様相

第一章 文久・元治期における加賀藩の藩是と「藩論」

第二章 慶応末期加賀藩における政治過程と藩是・

「藩論」

第三章 明治初年加賀藩の政治過程と職制改革の特

質

第四章 明治初年の加賀藩における人材登用—藩議事

など藩組織改編との連関—

第二部 政策分析からみる組織と軍事

第五章 幕末期における加賀藩上層部の体制と

京都詰—陪臣叙爵・序列の分析を中心に—

第六章 幕末期加賀藩における藩上層部の相克

—「西洋流」受容をめぐる論議—

第七章 加賀藩銃卒制度の成立・展開と動員の論理—

農兵・兵賦・新足軽並—

第八章 幕末期加賀藩軍制改革と戊辰戦争への動員

終章 藩研究の可能性

序章では、「日和見」としてラベリングされてきた加賀藩イメージを問い直し、新たな加賀藩の位置づけを近年の明治維新研究の成果のなから構築しようとしていることが読み取れる。本書全体の問題意識でもあるが、近年の地域史への厳しい指摘を意識していることは確実であり、さらに、精緻な個別実証研究がもたらした成果と課題への著者なりの立ち位置が現れていると言える。分析視角の特徴は、「言説」への注目や、「政治意思決定分析」と「公議」に着目した点にある。そのうえで、本書の方法論の特徴を、政治過程における藩是―「藩論」の成立とその具体的な行動の段階分析とする。その藩是・「藩論」とは、「藩が政治運動を展開する上で根本となる政治指標、いわば藩にとつての最高政治意思を藩是とし、藩是に基づいて策定された具体的な計画や主張といった政策や理論を「藩論」と定義」(二二頁)する。そして、「藩内の政治意思を集約すべく至当性を体現」する存在として、藩主の「御意・親翰」「御前評議」に注目するとした。こうした方法を提示する以上、

本書の構成でもっとも重要なのは第一部であり、とくに政治過程に関しては幕末期の第一章・第二章が中心となっていることがよくわかる。そして、その分析を受けてはじめて明治初年を対象とした第三章・第四章の藩組織論や、第

二部第五章と第八章の政策分析・組織・軍事改革論等が立論されているからである。そして全体的な本書の構成には、近年の成果がちりばめられており、その目配りの広さと研究動向全体への意識的な対応には敬意を表したい。

さて、第一章と第二章では、序章での藩是・「藩論」の定義に従い、その「政治意思決定」のもっとも重要な存在として藩主を位置づけ、①御意、②親翰、③「御前評議」をあげて、文久期から鳥羽・伏見戦争までの加賀藩の「政治意思決定」を分析している。とくに「藩の政治意思決定および循環モデル」(二三頁の図6)の提示は、今後の諸藩における「政治意思決定」の議論の的になる問題提起である。まず、文久三年(一八六三)七月の藩是決定では、御意↓「御前評議」↓(藩是確定)↓親翰というプロセスがあざやかに論述されている。そして「藩是(天皇の勅慮のもとでの公武)―(政令)―途体制の構築」に基づいた「藩論」(長州擁護と横浜鎖港)に則って進められる政治運動のプロセスが展開されている。禁門の変後の世嗣慶寧の退京と一斉処分・人事改編等は、「藩存続を第一義とする政治的リアリズム」(七二頁)と評価した。

第二章では、王政復古のクーデター当日に入京し、わずか三日で退京することとなる藩主慶寧の動向と、「割拠」

論をめぐる藩内状況についての議論が展開されている。京都を離れて金沢到着後、想定される三つの選択肢のなかで、慶寧は、「割拠」ではなく、徳川家に「加越能三州を領有する正当性を負託」（一〇五頁）し、「朝廷尊崇による徳川家支援」（一一八頁）を重んじたという。しかし、鳥羽・伏見戦争勃発による状況の激変により、藩の徳川支援の出兵は見直され「朝廷尊崇の貫徹と徳川家支援の挫折」（一一九頁）となつていった。ここで興味深いのは、前藩主前田斉泰と慶寧の方法が異なることであろう。「御前評議」を重んじた前藩主に対して、慶寧はむしろ御意・親翰による政治意思の表明を重んじているという。以上、著者は、幕末・維新期加賀藩の政治史のなかで、この藩是の修正をフィードバックとしてとらえたのである（終章）。その後は、「新政府の命令の恭順」「こそが「勤王」として進められていくこととなる。

第三章では、明治初年の加賀藩の職制改革に着目し、「政府による府藩県三治制の徹底化に相応しい藩モデル（「列藩之標的」）を追求」（一四九～一五〇頁）したとする。新政府による藩の解体が矢継ぎ早に進められていくなかで、それに応じた職制改革を進めていったと評価されるのである。その職制改革の特徴は、明治初年執政が暗殺されるな

ど藩内の不安情勢のなか、新たな人材の抜擢を推し進める一方で、重臣層の温存にも配慮したという。こうした流れが、明治中後期の地域アイデンティティの回復を目指す動きへとつながつていったと展望する。第四章では、第三章を受けて具体的な人材登用の特徴を論じている。新政府から要請された金沢藩の貢士さらには徴士には実務層からの登用があつた。そして、執政・参政体制から大参事・少参事体制にかけて実務層を重んじる方向性は維持されつつ、重臣層とのバランスもはかられていたことが指摘されている。しかしながら、藩制によりさらに徹底した改革が求められ、上層部の免官と実務層の大参事・少参事への昇進という形で人事対応が進められていった。本書では、こうした組織改革の特徴を「藩公議」として改めて問う必要性を提起する（一八四頁）。

第二部第五章・第六章は、幕末加賀藩の上層部分析である。まず第五章は、藩上層部の構成の特徴および京都詰体制と政局論が述べられている。まず、政治的な意思決定に携わる主体、藩主前田斉泰・世嗣慶寧、年寄（藩主補佐の執政役）について概要が述べられている。さらに、家老の位置づけも明らかにし、幕末加賀藩の「政治意思決定」の重要ポストを提示する。とくに、年寄の陪臣叙爵や、家老

の「年寄中席御用加判」(二〇五頁)、意見上申のバリエーションを展開された点などは、加賀藩の特徴を顕著に示すとともに近年の諸藩研究との比較も意識したものと云える。

次に、こうした人員で文久期以降に京都詰体制が構築・展開されたことが述べられている。契機としては、將軍の上洛にあわせた藩主上京で、その後朝廷や幕府からの警衛命令をうけ、在京の藩士を指揮・統制する目的で成立したとする。京都における朝廷からの情報、二条家や鷹司家からが主で、とくに前者に重きを置いていたため、幕府側に偏った情報となっていたという。具体的な政治判断の例としては、京都詰家老前田孝錫の職務日記「京都詰中手留」を手掛かりに分析している。王政復古以降の藩の「政治意思決定」において、京都と国元の乖離があったものの、後日その正当性が確認されていくというものである。

第六章の特徴は、すでに海防に関する研究蓄積があることを踏まえて、著者の視角である「政治意思決定」という視点を盛り込んだ点であろう。主に使用された史料が、藩主の意向を示す「親翰留」文政四年～明治四年(一八二一～一八七二)および年寄奥村栄通「御用方手留附録」であるように、藩の意思決定に関わる上層部の人物たちがいか

に海防政策を考えていったのかを考察するものである。「西洋流」受容を主張する壮猶館とその連携をとる年寄衆(海防方御用主附)と、攘夷論の高揚のなかで兵器のみの採用認可を進める現実路線の斉泰との間で齟齬が発生していく様子をうかがうことができる。諸藩のなかで少なからず見られる現象とも言えるが、加賀藩では、藩是の決定で攘夷に視点を置いたことで、かえって洋式導入を困難にしたプロセスが興味深い。薩摩藩や長州藩などとは異なるこうした洋式受容のあり方は重要な議論だと思われる。幕末の政治・軍事改革を考えていくうえで、大枠としての「攘夷」体制が持つ強制力、巨大な藩の意思決定の難しさ、藩内の調和・調停にこだわる姿勢、あるいは最大公約数的な藩内一致を目指す藩主のあり方等々は今後さらに注目してもいいのではないかと思われる。

第七章・第八章では具体的な軍事改革の分析が行われているが、とくに藩主の親翰などを取り上げた点が注目される。まず第七章の加賀藩の銃卒制度については、郷土防衛意識を喚起して地域の治安維持に特化した農兵制度、あるいは西洋軍制に基づき幕府直属の兵卒として徴発した兵賦制度という従来の研究成果を整理しつつ、同藩の特徴を具体的に提示した。嘉永期からいくつか提言はあったもの

の、本格的には文久期の動向のなかで具体化が模索されていくこととなる。本書が注目したのは、文久二年（一八六二）の親翰で、多くの藩士の動員も想定しつつ、百姓らの動員も視野に入れるようになってきたという。こうした動きが目指した先には、「藩主斉泰を頂点に重臣層らで構成される海防方、銃卒仕立奉行を配置して具体案を練る壮猶館、実際に現地で実施・監督を担う三州郡奉行・遠所町奉行、そして財政面を担当する算用場奉行といった体制」（二七九頁）の構築が見えてくるのではないかと指摘している。そして、文久三年（一八六三）二月には銃卒制度の大綱が告知され、同年五月銃卒撰方規則や各地の実情を踏まえながら稽古細則を策定していく。ここでは、「難渋の者」を組み込んでいくかが一つのポイントとなる。どちらにしても、身分そのものは変更せずに銃卒の編成を進めたいと評価する。

さらに本章では、部隊としての銃卒の位置づけを明らかにするために、身分的なことにも重点をおいている。まず、禁門の変後の京都、あるいは長州征討など藩外派出の銃卒については、一時的に身分変更して藩軍事力の一部を構成したとした。一方、水戸天狗党西上の警備などは、銃卒でも身分変更しておらず、郷土防衛の範囲内での扱いとなっ

たと評価する。身分に関わる点は、戊辰戦争北越戦線へ出兵した際もあくまで藩直属の軍事力とは見なししていなかったが、文久期とは異なり、夫役ではなく「傭兵」的な側面が指摘できるとする。

第八章では、「西洋流」受容をめぐる元治期の大砲隊創出や慶応期の軍制改革が展開される。とくに慶応三年（一八六七）三月京都からの帰国後の藩主慶寧の親翰は、銃陣編制の重要性を説き、同年十月には大規模な軍制改革が行われる。しかしながら、身分制の維持は強く、かなり形式的なものが多かったと改めて評価する。戊辰戦争のとき、高田越後への出兵が命じられ、大幅な編制の変更などを行っているといる。ここで、薩長の軍とともに北越戦線を戦っていくこととなったのである。この章において指摘された新政府の動員命令などによって劇的に変化していく軍事編制などのあり方は、今後様々な藩においても見ていく必要がある。

終章では、「循環モデル」の総括とその限界も指摘されており、藩主の「決断」のあり方が加賀藩の特徴として改めて提示された。さらに政治判断するうえで、「家臣団の衆議」と藩主による「至当性」なども指摘され、「藩公議」という視点についても独自の議論が展開されている。つま

り、藩主の「公儀」性とは、衆議と至当性をあわせて考える必要があると問題提起する。慶寧の上洛や京都における判断などは、こうした政治意思決定のプロセスと循環モデルなどによって説明することができることを改めて提起した。

二、若干のコメント

本書は、とくに宮地正人氏の問題提起を意識しつつ、地域史研究と通史との関連を追究しながら立論されている側面が強い。そのことが、意欲的な著書を作成する原動力となっている。また、幕府・朝廷・諸藩等に貼られた「ラベリングからの解放」(二五九頁)を目標とする本書の主張を、どのように受け止めいくのが私自身にも問われているように感じ、そして改めて考えさせられた。このような機会をいただき感謝するものである。

本書の意義は、加賀藩の「政治意思決定」に着目することで、諸藩と共通の幕末政治のあり方を検討する方向性を作ったことにある。従来の討幕派の形成や政治主体論などの政治的な動きや結果で評価していく方向性ではなく、その決定に関わるプロセスやシステムに着目していくこと

で、多くの諸藩やその諸階層を俎上にあげて議論できるものに組み替えていったことにある。こうした本書の論述は、近年の少なからぬ研究成果に裏打ちされたものであり、評者も賛同するところである。また、「政治意思決定」に関わるものが、必ずしも藩主や上層部だけでなく、システム的な視点からも、改めて諸階層の人々の考えが反映する「藩公議」のあり方を視野に入れなければならないことを確認できた。本書は、討幕勢力として結実していくことへの特殊性を日本近代の政治的特性として見出すのではなく、幕末・維新期の諸藩がそれぞれ抱えていた組織的な改革や、激しく流動化していく政治状況にいか「決断」して対応していくのかに焦点を据えた。そのことにより、多様な諸藩を政治史の俎上に載せることができるような問題提起の書として、現在の研究潮流を代表するものといえよう。

特徴については、要約のところには気が付いた限りで書き込んでおいたので、以下は、若干のコメントを四点ほど述べさせていたきたい。

まず、幕末・維新期加賀藩の「政治意思決定」の研究としては、ほとんど異論のないところであるが、若干関心を持った点を取りあげさせていただければ、藩主によって意思決定のあり方が異なっていることであろう(一一八〜九

頁)。幕末の加賀藩主前田斉泰と慶寧の継承と断絶の議論は、今後もっと深めていく必要があるように思う。とくに前田斉泰は、将軍家斉の娘を正室に持ち、四十五年という極めて長期にわたる治政を敷いており、幕末期における加賀藩は斉泰が作り上げてきた藩と言っても過言ではないだろう。この点は、今後十分な検討を要するものと思う。すでに本書などで指摘されていることでもあるが、斉泰から慶寧への移行はもっと追及されてもいいのではないかと考える(例えば、第八章の西洋流受容に関する点など)。いわゆる「四賢侯」と称されるような性格をもった藩主と異なり、長州藩などの藩主も含めた新たな幕末・維新期の「君主」像の研究が、加賀藩の両藩主ではできるように考える。さらに、本書でも指摘されているような近習などの役割なども視野に入れた成果は是非期待したいところである。

次に、本書では文久期〜慶応四年(一八六一〜一八六八)までを一つの循環として図式的にとらえている。そのため、第二章鳥羽・伏見戦争勃発前後の、徳川家支援と朝廷尊崇の藩是修正は、本書ではフィードバックとしてとらえている(三五二頁)。しかしながら、第一章の禁門の変後の世嗣慶寧の退京および一斉処分の評価は、国許・京都関係や親翰機能などの「限界」(同頁)ととらえるのか、それと

も「藩存続の危機に際して冷徹かつ極めて現実的な政治判断(藩存続を第一義とする政治的リアリズム)」(七二頁)なのか、評者には少しわかりにくかった。個人的には、これを藩是・「藩論」の修正・フィードバックとしてとらえてはいけないうか。どうかの議論がもっと必要だと思われる。あるいは、加賀藩の一斉処分などは、藩是・「藩論」の枠組みではとらえきれない何かほかの分析軸が必要なのではないだろうか。以前は建白を受け入れていた小川幸三のような人物を「掃しようとするのは、もつと様々なことが考えられるような気がする。諸藩においても、この時期の藩内抗争の激化とその処分は重なるところであり、「尊攘」「佐幕」などだけではなく、もつと幅広い視野からこの問題にもアプローチできないものかと感じた。

第三点としては、京都や藩外活動に関わる視点である。本書でも、第五章で京都詰の重要性が改めて指摘され、藩の「政治意思決定」においても、重要な判断材料を提供していることされる(二二六頁)。しかしながら、幕末京都における加賀藩の研究はもっと深めるべきではないだろうか。近年の千葉拓真氏の一連の研究で、京都藩邸の実態や撰家との関係については大きな進展を見せているが、幕末においては、二条家や鷹司家との経済関係や情報のやりと

りなどの具体的な取り組みはこれからのように思う。個人的には、京都・大坂方面や諸藩との間で重要な役割を果たしていく「情報探索方」福岡与平・小川幸三・高木守衛（第一章）のような存在をもっと詳しく知りたい。藩是・「藩論」を策定するうえで「京都」が最重要な位置づけをされている以上、彼らの京都・大坂等藩外の情報は、決定的な意味を持つていえる。また、京都詰家老に情報をもたらす聞番の情報とはどのようなルートで入ってくるものなのか非常に気になった（二一九頁）。いずれにしても、直接「政治意思決定」に関わる上層部だけではなく、様々な政治活動を展開する加賀藩士等の動きをもっと明らかにすべきではないかと感じた。

第四点としては、軍事改革の捉え方である。第六章・第八章では、軍制を中心に据えているため論じられていないだけかもしれないが、発機丸購入をめぐる問題である。従来の軍事・軍制改革的な視点からみれば、様々な改革の一つに過ぎないかもしれないが、個人的には幕府の制度改編および藩の軍力にかかわって画期的な意味をもつと考えている。あわせて、將軍上洛という事態が諸藩に与えた影響も極めて大きい。加賀藩が軍艦購入を本格的に検討し最初に購入した時期が文久二年（一八六二）であることは、

諸藩の動向と一致している（神谷大介『幕末の海軍』吉川弘文館、二〇一八年）。同年六月朔日徳川家茂は上洛の意思を前田斉泰に伝え、同日中には前田慶寧に政治変革の意見を求めている。その際老中から寛永以来「隆典」となっていた上洛が行われることが告げられ、「從來之弊風御一洗御武威被遊御拡張、皇國を世界第一之強國と被遊御偉業を被為立候而、上は天朝之宸襟を奉安、下は万民を安堵為致度との思召」（『加賀藩史料藩末篇』上巻、一九五八年、一二三五頁）と、徳川家の意欲的な政治改革への姿勢が明示された。同年六月十一日には、加賀藩の將軍供奉は先例もあり、軍艦等も「二・三艘」程度必要なことが指摘されており、さらに、小川幸三の上書がでてくるのもこの八月のことであり、九月には西洋流の軍制への取り組みも前進する流れが出てきている（同上参照）。その意味では、この高額な軍艦の導入は、藩の海軍的な位置づけだけでなく、幕府改革との関連や將軍上洛や参勤交代の緩和、そして藩内の政治改革・軍事改革などを含めて考えるべきではないだろうか。とくに文久二年からの政治・軍事改革の活性化は、幕府の動向と軌を一にしていると考えられ、藩主など藩首脳陣や藩内の「衆議」がそれをどのように認識し、藩内の「西洋流」受容に関わっていったのかをもっと明らかに

にできるのではないかと思われる。

以上簡単ではあるが、コメントを述べさせていただいた。繰り返しになるが、本書は、今後の幕末・維新期の語藩を議論していくうえで重要な問題提起をなすもので、これを真摯に受け止め一緒に議論を作り上げていく必要性を痛切に感じている。今後の著者のさらなる成果に期待するものである。

(二〇一九年六月刊、有志舎、三九四頁、六六〇〇円＋税)